

芥川龍之介

あの頃の自分の事



あの頃の自分の事

以下は小説と呼ぶ種類のものではないかも知れない。そうかと云って、何と呼ぶべきかは自分も亦不案内である。自分は唯、四、五年前の自分とその周囲とを、出来る丈だけこだわらずに、ありのまま書いて見た。従って自分、或あつは自分たちの生活やその心もちに興味のない読者には、面白くあるまいと云う懸念もある。が、この懸念はそれを押しつめて行けば、結局どの小説も同じ事だから、そこに意を安んじて、発表する事にした。序ながらありのままと云っても、事実の配列は必しもありのままでは

ない。唯事実そのものだけが、大抵ありのままだと云う事をつけ加えて置く。

一

十一月の或晴れた朝である。久しぶりに窮屈な制服を著て、学校へ行ったら、正門前でやはり制服を著た成瀬に遇った。こつちで「やあ」と云うと、向うでも「やあ」と云った。一しよに角帽を並べて、法文科の古い煉瓦造の中へはいったら、玄関の掲示場の前に、又また和服の松岡

7

がいた。我々はもう一度「やあ」と云った。

立ちながら三人で、近々出そうとしている同人雑誌『新思潮』の話をした。それから松岡がこの間、珍しく学校へ出て来て、西洋哲学史か何かの教室へはいったが、何時まで待っても、先生は勿論もちろん学生も来る容子が無い。妙だと思って、外へ出て小使に尋きいて見たら、休日だったと云う話をした。彼は電車へ乗る心算で、十銭持つって歩もりながら、途中で気が変かって、煙草屋へはいると、平然として「往復を一つ」と云った人間だからこんな事は家常茶飯である。その中に、傴僂のような小使が朝の時間

を知らせる鐘を振って、大急ぎで玄関を通りすぎた。

朝の時間はもう故人になったロオレンス先生のマクベスの講義である。松岡と分れて、成瀬と二階の教室へ行くと、もう大ぜい学生が集って、ノオトを読み合せたり、むだ話をしたりしていた。我々も隅の方の机に就いて、新思潮へ書こうとしている我々の小説の話をした。我々の頭の上の壁には、禁煙と云う札が貼ってあった。が、我々は話しながら、ポケットから敷島を出して吸い始めた。勿論我々の外の学生も、平気で煙草をふかしていた。すると急にロオレンス先生が、鞆をかかえて、はいつて

来た。自分は敷島を一本完全に吸ってしまったて、殻も窓からすてた後だったから、更に恐れる所なく、ノオトを開いた。しかし成瀬はまだ煙草を啣くわえていたから、すぐにそれを下へ捨てると、慌てて靴で踏み消した。幸、口オレンス先生は我々の机の間から立昇る、縷る々るとした一條の煙に気がつかなかつた。だから出席簿をつけてしまつと、早速毎時もの通り講義にとりかかつた。

講義のつまらない事は、当時定評があつた。が、その朝は殊につまらなかつた。始からのべつ幕なしに、梗概こうがいばかり聴かされる。それも一々 Act 1, Scene 2 と云う調

子で、一くさりずつやるのだから、その退屈さは人間以上だった。自分は以前はこう云う時に、よく何の因果で大学へなんぞはいったんだろうと思ひ思ひした。が、今ではそんな事も考えない程、この非凡な講義を聴く可く余儀なくされた運命に、すっかり黙従し切っていた。だからその時間も、機械的にペンを動かして、帝劇の筋書の英訳のようなものを根気よく筆記した。が、その中に教室に通っているステイムの加減で、だんだん眠くなつて来た。そこで勿論、眠る事にした。

うとうとして、ノオトに一頁ばかりブランクが出来た

時分、ロオレンス先生が、何だか異様な声を出したので、眼がさめた。始めはちよいと居睡りが見つかって、叱られたかと思ったが、見ると先生は、マクベスの本をふり翳かざしながら、得意になって、門番の声色を使っている。自分もあの門番の類だなと思ったら、急に可笑しくなつて、すっかり眠気がさめてしまった。隣では成瀬がノオトをとりながら、時々自分の方を見て、くすくす独りで笑っていた。それから又、二、三頁ノオトをよごしたらやつと時間の鐘が鳴った。そうして自分たちは、ロオレンス先生の後から、ぞろぞろ教室の外の廊下へ溢れ出した。

廊下へ出て、黄いろい葉を垂らした庭の樹木を見下している、豊田実君が来て、「ちよいとノオトを見せてくれ給え」と云った。それからノオトを開けて見せると、豊田君の見たがっている所は、丁度自分の居眠りをした所だったので、流石に少し恐縮した。豊田君は「じやようござんす」と云って、悠然と向うへ行ってしまった。悠然と云うのは、決して好い加減な形容じやない。実際君は何時でも、悠然と歩いていた。豊田君は今どこで何をしているか、判然とした事は承知しないが、ロオレンス先生に好意を持ち、若しくはロオレンス先生が好意を

持った学生の中で、我々——と云って悪るければ、少くとも自分が、常に或程度あるの親しみを感じていた、たった一人の人間である。自分はこれを書いている今でも、君の悠然とした歩き方を思い出すと、もう一度君と大学の廊下に立って、平凡な時候の挨拶でも交換したいような気がしないでもない。

その中に又、鐘が鳴って、我々は二人とも下の教室へ行く事になった。今度は藤岡勝二博士の言語学の講義である。外の連中は皆先へ行つて、ちゃんと前の方へ席をとって置くが、なまけ者の我々は、何時でも後からはい

って行つて、一番隅の机を占領した。その朝もやはりこ
う云う伝でんで、愈々鐘いよいよが鳴る間際まで、見晴しの好い二階
の廊下に徘徊していたのである。藤岡博士の言語学の講
義は、その朗々たる音吐とグロテスクな諧謔とを聞くだ
けでも、存在の権利のあるものだった。尤もつとも自分の如
く、生来言語学的な頭脳に乏しい人間にとってには、それ
だけで存在の権利があつたと云い直しても別に差支えは
ない。だから今日も、ノオトをとったりやめたりしなが
ら、半分はそう云う興味で、マツクミュラアがどうか
したとか云う講義を面白がつて聴いていた。すると自分

の前の席に、髪の毛の長い学生が坐っていて、その人の髪の毛が、時々自分のノオトの上を、掃くようにさらさら通りすぎた。自分は相手が名前も知らない人の事だから、どう云う了見で、あんな長髪を蓄えているのだから、つい今日に至るまで問い質す機会を失ってしまったが、兎とに角かくそれが彼自身の美的要求には合していても、他人の実際的要求と矛盾し得る事を発見したのは、正にこの言語学の講義を聞いていた時間である。しかし幸、その講義を聴こうと云う、自分の実際的要求がそれ程痛切でなかつたから、髪の毛が邪魔になつた所だけは、ノオト

をとらずに捨てて置いた。その中には邪魔にならない所でも、ノオトの代りに画を描く事にした。所が向うに坐っている、何とか云う恐しくハイカラな学生の横顔を、半分がた描いた所で運悪く鐘が鳴った。講義の終を知らせると同時に、午になった事を知らせる鐘である。

我々は一しよに大学前の一白舎の二階へ行つて、曹達ソオダ水すいに二十銭の弁当を食った。食いながらいろんな事を弁じ合つた。自分と成瀬との間には、可也かなり懸隔てのない友情が通っていた。その上その頃は思想の上でも、一致する点が少くなかった。殊に二人とも、偶然同時に「ジア

ン・クリストフ」を読み出して、同時にそれに感服していた。だからこう云う時になると、毎日のように顔を合せている癖に、やはり話がはずみ勝ちだった。すると二人のいる所へ、給仕の谷がやって来て、相場の話をし始めた。それも「まかり間違ったら、これになる覚悟でなくっっちゃ駄目ですね」と、手を後へまわして見せたのだから盛である。成瀬は「莫迦だな」と云って、取合わなかったが、当時「財布」と云う小説を考えていた自分は、さまざまな意味で面白かったから、食事をしまうまで谷の相手になった。そうして妙な相場の熟語を、十ばかり

一度に教えられた。

午後は講義がなかったから、一白舎を出ると二人で、近所の宮裏に下宿している久米の所へ遊びに行った。久米は我々以上のなまけ者だから、大抵は教室へも出ずに、下宿で小説や芝居を書いていたのである。行つて見ると、やはり机の側に置炬燵を据えて、「カラマゾフ兄弟」か何か読んでいた。あたれと云うから、我々もその置炬燵へはいつたら、掛蒲団の脂臭い匂が火臭い匂と一しよに鼻を打った。久米は今、彼の幼年時代に自殺した阿父おとうさんの事を、短篇にして書いていると云った。小説はこれ

が処女作同様だから、見当がつかなくて困るとも云った。が、相不変元気の好きそうな顔をして、余り困っているらしい容子もなかった。その後で「君はどうした」と尋くから、「やっと「鼻」を半分ばかり書いた」と答えた。成瀬も今年の夏、日本アルプスへ行った時の話を書きかけていると云う事だった。それから三人で、久米の拵えた珈琲を飲みながら、創作上の話を長い間した。久米は文壇的閱歴の上から云って、ずっと我々より先輩だった。と同時に又表現上の手腕から云っても、やはり我々に比べると、一日の長がある事は事実だった。特に自分はこ

の点で、久米が三幕物や一幕物を容易にしかも短い時間で、書き上げる技倆に驚嘆していた。だから我々の中で、久米だけは、彼自身の占めている、或は占めんとする、文壇的地位に相当な自信を持っていた。そうしてその自信が又一方では、絶えず眼高手低の歎を抱いている我々に、我々自身の自信を呼び起す力としても働いていた。実際自分の如きは、もし久米と友人でなかったら、即彼の煽動によつて、人工的にインスピレーションを製造する機会がなかったなら、生涯一介の読書子たるに満足して、小説などは書かなかつたかも知れない。そう云う次

第だから創作上の話になると——と云うより文壇に關係した話になると、勢何時も我々の中では、久米が牛耳を執る形があつた。その日も彼が音頭とりで、大分議論を上下したが、何かの關係で田山花袋氏が度々問題に上つたように記憶する。

今になつて公平に考えれば、自然主義運動があれ丈大きな波動を文壇に与えたのも、全く一つは田山氏の人格の力が然らしめたのに相違ない。その限りに於て田山氏は、氏の「妻」や「田舎教師」が如何に退屈であるにしても、乃至又氏の平面描写論が如何に幼稚であるにして

も、確に我々後輩の敬意——とまで行かなければ、少くとも興味位は惹くに足る人物だった。が、遺憾ながら當時の我々は、まだこの情熱に富んだ氏の人格を、評価するだけの雅量に乏しかった。だから我々は氏の小説を一貫して、月光と性慾とを除いては、何ものも発見する事は出来なかつた。と同時に氏の感想や評論も、その怪しげな *à la Huysmans* の入信生活を聞かされる度に、先 まよDurtal と田山花袋氏との滑稽な対照を思い出させて、徒に我々の冷笑を買うばかりだった。では我々は氏を目して、全然ハムバツグとしていたかと云うと必しも亦 また そう

じやない。成程小説家としての氏や思想家としての氏は、更に本質的なものだとは思わなかったが、それらに先立って我々は、紀行文家としての田山氏を認めていた。

Sentimental landscape-painter ——これが当時の自分が、

田山氏へ冠かむらせていた渾名あだなだった。実際氏は、小説や評論を書く合い間に、根気よく紀行文を書いていた。いや少し誇張して云えば、小説の多くも紀行文で、その中に Venus Libentina の信者たる男女を点出したものに過ぎなかった。そうしてその紀行文を書いている時の氏は、自由で、快活で、正直で、如何にも青草を得た驢馬のよ

うに、純真無垢な所があつた。従つてそれだけの領域では、田山氏はユニクだと云おうが何だろうが差支えない。が、氏を自然主義の小説家たり、且思想家たる文壇の泰斗と考える事は、今よりも更に出来憎かつた。遠慮のない所を云うと、自然主義運動に於ける氏の功績の如きも、「何しろ時代が時代だつたからね」なぞと軽蔑していたものである。

大体こんなような気焔をあげてから、又成瀬と二人で、久米の下宿を出た。出た時分には、短い冬の日脚が、もう往来へ長い影を落していた。我々は我々のよく知つて

いる、しかも常になつかしい興奮を感じながら、本郷三丁目の角まで歩いて行って、それから別々の電車へ乗った。

二

三、四日たった、これも好い天気の日のことである。自分は午前の講義に出席してから、成瀬と二人で久米の下宿へ行つて、そこで一しよに昼飯を食つた。久米は京都の菊池が、今朝送つてよこしたと云う戯曲の原稿を見せ

た。それは「坂田藤十郎の恋」と云う、徳川時代の名高い役者を主人公にした一幕物だった。読めと云うから読んで見ると、テエマが面白いのにも関らず、無暗に友染縮緬せりふのような台辞が多くって、どうも永井荷風氏や谷崎潤一郎氏の糟粕を嘗めているような観があつた。だから自分は言下に悪作だとけなしつけた。成瀬も読んで見て、やはり同感は出来ないと云った。久米も我々の批評を聞いて、「僕も感服出来ないんだ。一体に少し高等学校情調がありすぎるよ」と、同意を表した。それから久米が我々一同を代表して、菊池の所へその意味の批評を、手

紙で書いてやる事にした。そこへ幸い松岡も遊びに来た。松岡は我々三人が英文科に籍を置いているのにも関わらず、独り哲学科へはいつていた。が、勿論我々と同じように、創作もする心算だった。彼は我々の中で、一番久米と親しかつた。一しきりは二人で、同じ家に下宿していた事もあつた。それは砲兵工廠の裏にある、職工服を造る家だった。実生活上のロマンティケルだった久米は、今にあの青い職工服を着て、アトリエのような書斎へ西洋机を据えて、その書斎を久米正雄工房と名づけたいなどと云う、途方もない夢をよく見ていた。自分は彼等を

その下宿に訪問すると、何時もこう云う久米の夢を思い出したものだった。が、松岡はその時分から、余り職工服とは縁のない思想なり心もちなりを持っているらしいかった。まだ感傷癖こそ脱しなかったが、彼の中には宗教の匂のするものが、もうふんだんに磅礴ほうはくしていた。彼はその東洋とも西洋ともつかないイエルサレムの建設を、ろみながらキエルケガアドを愛読したり、怪しげな水彩画を描いて見たりした。当時彼の描いた水彩画の一つにさかさまにした方が遙に画らしくなるものがあったのは、今でもよく覚えている。その後松岡は久米が宮裏へ

移ると共に、本郷五丁目へ下宿を移した。そうして今でもそこにいて、釈迦伝から材料を取った三幕物の戯曲を書いていた。

我々四人は、又久米の手製の珈琲を啜りながら、煙草の煙の濛々とたなびく中で、盛にいろんな問題をしゃべり合った。その頃は丁度武者小路実篤氏が、将にパルナスの頂上へ立とうとしている頃だった。従って我々の間でも、屢氏の作品やその主張が話題に上った。我々は大抵、武者小路氏が文壇の天窓を開け放って、さわやか爽やかな空気を入れた事を愉快に感じているものだった。恐らくこの

愉快は、氏の踵くびすに接して来た我々の時代、或は我々以後の時代の青年のみが、特に痛感した心もちだろう。だから我々以前と我々以後とでは、文壇及それ以外の鑑賞家の氏に対する評価の大小に、径庭があつたのは已むを得ない。それは丁度我々以前と我々以後とで、田山花袋氏に対する評価が、相違するのと同じ事である。（唯、その相違の程度が、武者小路氏と田山氏とで、どちらが真に近いかは疑問である。念の為に断つて置くが、自分が同じ事だと云うのは、程度まで含んでいる心算じゃない）。が、当時の我々も、武者小路氏に文壇のメシヤを見はしなかつ

た。作家としての氏を見る眼と、思想家としての氏を見る眼と——この二つの間には、又自らな相違があつた。作家としての武者小路氏は、作品の完成を期する上に、余りに性急な憾うらみがあつた。形式と内容との不即不離な関係は、屢氏自身が「雑感」の中で書いているのにも関わらず、忍耐よりも興奮に依頼した氏は、屢しばしば実際の創作の上では、この微妙な関係を等閑に附して顧みなかつた。だから氏が従来冷眼に見ていた形式は、「その妹」以後一作毎に、徐々として氏に謀叛を始めた。そうして氏の脚本からは、次第にその秀抜な戯曲的要素が失われて、

（全くとは云わない。一部の批評家が戯曲でないように云う「或青年の夢」でさえ、一齣一齣の上で云えばやはり戯曲的に力強い表現を得た個所がある）氏自身のみを語る役割が、己自身を語る性格の代りに続々としてそこへはいつて来た。しかもそこに語られた思想なり感情なりは、必然性に乏しい戯曲的な表現を借りているだけ、それだけ一層氏の「雑感」に書かれたものより稀薄だった。「或家庭」の昔から氏の作品に親しんでいた我々は、その頃の——「その妹」の以後のこう云う氏の傾向には、あきた慊らない所が多かった。が、それと同時に、又氏の「雑感」

の多くの中には、我々の中に燃えていた理想主義の火を吹いて、一時に光焰を放たしめるだけの大風のような雄々しい力が潜んでいる事も事実だった。往々にして一部の批評家は、氏の「雑感」を支持すべき論理の欠陥を指摘する。が、論理を待って確められたもののみが、真理である事を認めるには、余りに我々は人間的な素質を多量に持ちすぎている。いや、何よりもその人間的な素質の前に真面目であれと云う、それこそ氏の闡明した、大いなる真理の一つだった。久しく自然主義の淤泥にまみれて、本来の面目を失っていた人道ユウマニテエが、あのエマヲ

のクリストの如く「日^{かたぶ}昇きて暮に及んだ」文壇に再姿を現した時、如何に我々は氏と共に、「われらが心^{もえ}熱し」事を感じたろう。現に自分の如く世間からは、氏と全然反対の傾向にある作家の一人に数えられている人間でさえ、今日も猶氏の「雜感」を読み返すと、常に昔の澎湃とした興奮が、一種のなつかしさと共に還つて来る。我々は——少くとも自分は氏によつて、「驢馬の子に乗り^{なんじ}爾^{なんじ}に来る」人道を迎える為に、「その衣を途に布^しき或は樹の枝を伐りて途に布く」先例を示して貫つたのである。散々話をした後で、我々は皆一しよに、久米の下宿を

出た。それから本郷三丁目で成瀬と松岡とに別れた。久米と自分とは電車で銀座へ行つて、カツフェ・ライオンで少し早い晩飯をすませてから、ちよいと歌舞伎座の立見へはいつた。はいると新狂言の二番目もので、筋は勿論外題げだいさえ、更に不案内なものだった。舞台には悪く納つた茶室があつて、造花の白梅が所々に、貝殻細工のような花を綴つていた。そうしてその茶室の縁側で、今の中車の侍が、歌右衛門の娘を口説いていた。東京の下町に育ちながら、更に江戸趣味なるものに興味のない自分
は、芝居に対しても同様に、滅多にドラマティック・イ

リュウジョンは起す事が出来ない程、冷淡に出来上った人間だった。(或は冷淡にならされた人間かも知れない。芝居を見る事は二歳位の頃から、よく家のものと一しよに見た)。だから芝居より役者の芸が、役者の芸よりも土間棧敷の見物が、余程自分には面白かった。その時も自分の隣にいた、どこかの御店者おたなものらしい、烏打帽をかぶった男が、甘栗を食いながら、熱心に舞台を見ている方が、天下の名優よりも興味があつた。この男は熱心に舞台を見ていると云つたが、同時に又甘栗もやはり熱心に食つていた。それが懐へ手を入れたかと思うと、甘栗を一つ

つまみ出して、割るが早い口へ入れる、口へ入れたと
思うと、又懐へ手を入れて、つまみ出すが早いか割って
食う。しかもその間中、眼は終始一貫して、寸分も舞台
を離れない。自分はこの視覚と味覚との敏捷な使い分け
に感心して、暫くはその男の横顔ばかり眺めていたが、
とうとうしまいに彼自身はどちらを真剣にやっている心
算だか、尋いて見たいような気がして来た。するとその
時、自分の側で、久米がいきなり「橘屋あ」と、無鉄砲
に大きな声を出した。自分はびっくりして、思わず眼を
舞台の方へやった。見ると成程、女をたらすより外には

何等の能もなさそうな羽左衛門の若侍が、しようよう従容として庭伝いに歩いて来る所だった。が、隣の御店者は、久米の「橘屋」も耳にはいらぬように、依然として甘栗を食いながら、食いつくような眼で舞台を眺めている。自分も今度はその滑稽さが、笑うには余りに真剣すぎるよ
うな気がして来た。そうして又そこに小説めいた心もちも感じられた。しかし舞台の上の芝居は、折角その「橘屋」が御出でになっても、池田輝方氏の画以上に俗悪だった。自分はとうとう一幕が待ち切れなくって、舞台が廻ったのを潮に、久米をひっぱって外へ出た。

星月夜の往来へ出てから「あんな声を出して、莫迦だな」と云ったが、久米は「何、あれだって中々好い声だよ」と自慢して容易にその愚を認めなかった。今でもあの時の事を考えると、彼はカツフェ・ライオンで飲んだウイスキーに祟られていたものとしか思われぬ。

三

「一体大学の純文学科などと云うものは、すこぶる頗怪しげな代物だよ。ああやって、国漢英仏独の文学科があるけれ

ども、あれは皆何をやっているんだと思う？ 実は何をやっているか、僕にもはっきりとはわからないんだ。成程研究しているものは、各国の文学に違ひなからう。そうしてその文学なるものは、まあ芸術の一部門とか何とか云えるにや違ひない。しかしその文学を研究する学問だね、あれは一体学問だろうか。（或は独立した学問だろうかと云つても好いが）。もし学問とすれば、——むずかしく云えば *Wissenschaft* として成立するのに必要な条件を具えるとすればだね。そうすれば美学と同じものになつちまうじやないか。いや、美学ばかりじやない。文

学史なんぞは、始から史学と同じものだろうと思うんだ。そりや成程今純文学科でやっている講義にや、美学や史学と縁のないものだって、沢山ある。が、その沢山あるものは、義理にも学問だとは思われないじゃないか。あれはまあよく云えば先生の感想を述べたもので、悪く云えば出たらめだからね。だから僕は大学の純文学科なんぞは、廃止しちまった方がほんとうだと思うんだ。文学概論や何かは美学と一しよにする。文学史は史学へ片づけてしまう。そうしてあとに残った講義は、要するに出たらめだから、大学外へ駆逐しちまうんだ。出たらめだ

からと云って悪るければ、余りに高尚で、大学のような学問の研究を目的にする所には、不釣合だと云っても好い。これは確に目下の急務だよ。さもないと同じ出たらめでも、新聞や雑誌へ出た評論より、大学でやる講義の方が、上等のような誤解を天下に与え易いからね。それも実は新聞や雑誌へ出る方は、世間を相手にしているんだが、大学でやる方は学生だけを相手にしているんだから、それだけ馬脚が露れずにすんでいるんだろう。その安全なる出たらめが、一層箔をつけているのは、どう考えたって不公平だ。実際僕なんぞは無責任に、図書館の

本を読もう位な了見で、大学にはいつているんだから好いが、真面目に研究心でも起したら、一体どうすれば文学の研究になるんだか、途方にくれちまうのに違ひない。それや市河三喜さんのように言語学的に英文学を研究するんなら、立派に徹底していると思うんだ。けれどもそうすると、シエクスピアだろうが、ミルトンだろうが、詩でも芝居でもなくなつて、唯の英語の行列だからね。それじゃ僕はやる気もないし、やったって到底ものにはなりそうもないだろう。勿論出たらめで満足していりや好いが、それなら御苦労にも大学へはいらずとももの事だ。

又美学なり史学なりの立ち場から、研究しようとするならば、外の科へ籍を置いた方がどの位気が利いているかわからない。こう考えて来ると、純文学科のレエゾン・デエトルは、まあ精々便宜的位な所だね。が、いくら便宜でも、有害の方が多くっちゃ、勿論ないのに劣っていると云うもんだ。劣っている以上は、廃止した方が正当だよ。——何、あれは中学の教師を養成する為に必要だ？ 僕は皮肉を云っているんじゃない。これでも大真面目な議論なんだ。中学の教師を養成するんなら、ちやんと高等師範と云うものがある。高等師範を廃止しろな

んと云うのは、それこそ冠履顛倒だ。その理窟で行つても廃止さるべきものは大学の純文学科の方で、高等師範は一日も早くあれを合併してしまふが好い。」

その頃の或日、古本屋ばかり並んでいる神田通りを歩きながら、自分は成瀬をつかまえて、こんな議論をふっかけた事がある。

四

十一月もそろそろ末になろうとしている或晩、成瀬と

二人で帝劇のフィル・ハアモニイ会を聞きに行つた。行つたら、向うで我々と同じく制服を着た久米に遇つた。

その頃自分は、我々の中で一番音楽通だつた。と云うのは自分が一番音楽通だつた程、それ程我々は音楽に縁が遠い人間だつたのである。が、その自分も無暗に音楽会を聞いて歩いただけで、鑑賞は元より、了解する事も頗すこぶる怪しかつた。先一番よくわかるものは、リストに止めをさしていた。何時か帝国ホテルで、あのペッツォルド夫人と云うお婆さんが、リストの *der heilige Antonius schreitend auf den Wellen* (だと思ふ)。ちがつたら御免なさ

い)を弾いた時も、そのピアノの音の一つ一つは、寸刻も流動して止らない、しかも不思議に鮮な画面を、ありありと眼の前へ浮ばせてくれた。その画面の中には、どこを見ても、際限なく波が動いていた。それからその波の上には、一足毎に波紋を作る人間の足が動いていた。最後にその波と足との上に、煌々たる光があつて、それが風の中の太陽のように、眩く空中で動いていた。この明い幻を息もつかずに眺めていた自分は、演奏が終つて拍手の声が始つた時に、音楽の波動が消えてしまった、空虚な周囲の寂しさがしみじみ情なく感じられた。が、

こんな事は前にも云った通り、リストが精々行きどまりで、ベエトオフエンなどと云う代物は、好いと思えば好いようだし、悪いと思えば悪いようだし、更に見当がつかなかった。だからフィル・ハアモニイ会を聞くと云つても、一向芸術家らしくない、怪しげな耳をそば立てて、楽器の森から吹いて来るオオケストラの風の音を、漫然と聞いていたのである。

当夜は閑院宮殿下も御臨場になったので、帝劇のボックスや我々のいるオオケストラ・ストオルには、模様を著た奥さんや御嬢さんが大分方々に並んでいた。現に自

分の隣なぞにも、白粉をつけた骨と皮ばかりの老夫人が、金の指環をはめて金の時計の鎖を下げて、金の帯留の金物をして、その上にもまだあきた慊らず、齒にも一面に金を入れて、（これは欠伸をした時に見えたのである）端然として控えていた。が、前に歌舞伎座の立見をした時とは異なつて、今夜は見物の紳士淑女より、シオパンやシユウベルトの方が面白かったから、それ以上自分はこの白粉と金とに埋っている老夫人に、注意を払わなかつた。尤も彼女自身は、自分に輪をかけた、デイスイリユウジヨンそれ自身のような豪傑だつたと見えて、舞台上の上で

指揮杖を振っている山田耕作氏には目もくれず、頻に周
囲ばかりを見廻していた。

その中に山田夫人の独唱か何かで、途中の休憩時間
になると、我々は三人揃って、二階の喫煙室へ出かけて行
った。するとそこの入口に、黒い背広の下へ赤いチヨツ
キを著た、背の低い人が佇んで、袴羽織の連れと一しよ
に金口の煙草を吸っていた。久米はその人の姿を見ると、
我々の耳へ口をつけるようにして、「谷崎潤一郎だぜ」
と教えてくれた。自分と成瀬とはその人の前を通りなが
ら、この有名な耽美主義の作家の顔を、ぬす偷むようにそつ

と見た。それは動物的な口と、精神的な眼とが、互に我を張り合っているような、特色のある顔だった。我々は喫煙室の長椅子に腰を下して、一箱の敷島を吸い合いながら、谷崎潤一郎論を少しやった。当時谷崎氏は、在来氏が開拓して来た、妖氣^{あいたい}鬩^{あいたい}たる耽美主義の畠に、「お艶殺し」の如き、「神童」の如き、或は又「お才と巳之助」の如き、文字通り底気味の悪い *Fleurs du Mal* を育てていた。が、その斑猫^{はんみょう}のような色をした、美しい悪の花は、氏の傾倒しているポオやボオドレエルと、同じ荘嚴な腐敗の香を放ちながら、或一点では彼等のそれと、

全く趣が違っていた。彼等の病的な耽美主義は、その背景に恐る可き冷酷な心を控えている。彼等はこのごろた石のような心を抱いた因果に、嫌でも道德を捨てなければならなかつた。嫌でも神を捨てなければならなかつた。嫌でも恋愛を捨てなければならなかつた。が、彼等はデカダンスの古沼に身を沈めながら、それでも猶なほこの仕末に了えない心と—— *une vieille gabare sans mâts sur une mer monstrueuse et sans bords* の心と睨み合っていないければならなかつた。だから彼等の耽美主義は、この心に劫おびやかされた彼等の魂のどん底から、やむ

を得ずとび立った蛾の一群だった。従って彼等の作品には、常に *Ah ! Seigneur, donnez-moi la force et le courage / De contempler mon coeur et mon corps sans dégoût* と云うせっぱつまった嘆声か、瘴気の如く纏綿していた。我々が彼等の耽美主義から、厳粛な感激を浴びせられるのは、実にこの「地獄のドン・ジュアン」のような冷酷な心の苦しみを見せつけられるからである。しかし谷崎氏の耽美主義には、この動きのとれない息苦しきの代りに、余りに享樂的な余裕があり過ぎた。氏は罪悪の夜光虫が明滅する海の上を、まるでエル・ドラド

でも探して行くような意気込みで、悠々と船を進めて行った。その点が氏は我々に、氏の寧むしろ軽蔑するゴオテイエを髣髴させる所以だった。ゴオテイエの病的傾向は、ボオドレエルのそれとひとしく世紀末の色彩は帯びていても、云わば活力に満ちた病的傾向だった。更に洒落れて形容すれば、宝石の重みを苦にしている、肥満したサルタンの病的傾向だった。だから彼には谷崎氏と共に、ポオヤボオドレエルに共通する切迫した感じが欠けていた。が、その代りに感覚的な美を叙述する事にかけては、滾々こんこんとして百里の波を翻す河のような、驚く可き雄弁を

備えていた。(最近広津和郎氏が谷崎氏を評して、余り健康
 なのを憾うらみとすると云ったのは、この活力に満ちた病的傾向
 を指摘したものだろうと思う。が、如何に活力に溢れていて
 も、脂肪過多症の患者が存在し得る限り、やはり氏のそれは
 病的傾向に相違ない)。そうして此の耽美主義に慊あきたらな
 かった我々も、流石にその非凡な力を認めない訳に行か
 なかったのは、この滔々たる氏の雄弁である。氏はあり
 とあらゆる日本語や漢語を浚い出して、ありとあらゆる
 感覚的な美を(或は醜を)、「刺青」以後の氏の作品に螺鈿らでん
 の如く鏤ちりばめて行つた。しかもその氏の Les Emaux et

Camées は、朗々たるリズムの糸で始から終まで、見事にずっと貫かれていた。自分は今日でも猶、氏の作品を読む機会があると、一字一句の意味よりも、寧その流れて尽きない文章のリズムから、半ば生理的な快感を感じる事が度々ある。ここに至るとその頃も、氏はやはり今の如く、比類ない語ことばの織物師だった。たとい氏は暗澹たる文壇の空に、「恐怖の星」はともさなかつたにしても、氏の培った斑猫色の花の下には、時ならない日本の魔女のサバトが開かれたのである。――

やがて又演奏の始まりを知らせる相図のベルと共に、

我々は谷崎潤一郎論を切り上げて、下の我々の席へ歸つた。歸る途中で久米が、「一体君は音楽がわかるのかい」と云うから、「隣の金と骨と皮と白粉とよりはわかりそ
うだ」と答えた。それから又その老夫人の隣へ腰を下して、シヨルツ氏のピアノを聞いた。確たしか、シオパンのノクテユルヌとか何とか云うものだったと思う。シモンズと云う男は、子供の時にシオパンの葬式の行進曲を聞いて、ちやんとわかったと広告して居るが、自分はシヨルツ氏の器用に動く指を眺めながら、年齢の差を勘定に入れないでも、この点ではシモンズに到底及ばないと観念

した。そのあとは何があったか、もう今は覚えていない。が、会が終って外へ出たら、車寄のまわりに馬車や自働車が、通りぬけられない程沢山並んでいた。そうしてその中の一つの自働車には、あの金と白粉との老夫人が毛皮に顔を埋めながら、乗ろうとしている所だった。我々は外套の襟を立てて、その間をやっと風の寒い往来へ出た。ふと見ると、我々の前には、警視庁の殺風景な建物が、黒く空を衝いて聳えていた。自分は歩きながら、何だかそこに警視庁のある事が不安になった。で、思わず「妙だな」と云ったら、成瀬が「何が？」と聞き咎めた。

自分はいやとか何とか云って、好い加減に返事を胡麻化した。その時はもう我々の左右を、馬車や自動車が盛んに通りすぎていた。

五

ファイル・ハアモニイ会へ行つたあくる日、午前の大塚博士の講義（題目はリツケルトの哲学だった。これが自分が聞いた中では最も啓発される所の多かつた講義である）をすませた後で、又成瀬とこがらし 凧の吹く中を、わざわざ一

白舎へ二十銭の弁当を食いに行ったら、彼が突然自分に、
「君は昨夜僕等の後うしろにいた女の人を知っているかい」と尋ねた。「知らない。知っているのは隣の金と皮と骨と白粉とだけだ」。「金と皮と——何だい、それは」。「何でも好い。兎に角、後にいた女の人じゃない事は確だ。そうして君は又その女の人に惚れでもしたのかい」。「惚れる所か、僕も知らなかったんだ」。「何だ、つまらない。そんな人間なら、いたっていなくなつて、同じ事じゃないか」。「所がね。家に帰ったらムツタアが後の女の人を見たかと云うんだ。つまりその人が僕の細君の候

補者だったんだそうだね。「じゃ見合いか」。「見合い程まだ進歩したものでじゃないんだろう」。「だって見たかつて云えば、見合いじゃないか。君のムツタアも亦、迂遠だな。見せる心算なら、前へ坐らせりや好いのに。後にいるものが見える位なら、こんな二十銭の弁当なんぞ食っていやしない」。成瀬は親孝行な男だから、自分がこう云うと、ちよいと妙な顔をした。が、すぐに又、「しかし向うの女の人を本位にして云えば、僕等が前にいた事になるんだからな」。「成程、あすこじや両方で向い合っつていようと思つたら、どっちか一方が舞台へ上

らなくつちやならない訳だ。——訳だが、それで君は何
って返事をしたんだい。「見なかったって云ったあね。
実際見なかったんだから仕方がないじゃないか」。「そ
う今になって、僕に鬱憤を洩したって駄目だよ。だが惜
しい事をしたな。一体あれは音楽会だったから、いけな
いんだ。芝居なら僕が頼まれなくたって、帝劇中の見
物をのこらず物色をしてやるんだのに」。——成瀬と自
分とはこんな話をしながら、大笑いに笑い合った。

その日は午後には、ドイツ独逸語の時間があつた。が、当時
我々はアイアムビツクに出席するとか何とか云って、成

瀬が出れば自分が休み、自分が出れば成瀬が休んでいた。そうして一つ教科書に代る代る二人で仮名をつけて、試験前には一しよにその教科書を読んで間に合せていた。丁度その午後の独逸語は成瀬が出席する番に当たっていたから、自分は食事をしまうと、成瀬に教科書を引き渡して、独りで一白舎の外へ出た。

出ると外はこがらし 凧が、砂煙を往来の空に捲き上げていた。黄いろい並木の銀杏の落葉も、その中でくるくる舞いながら、大学前の古本屋の店の奥まで吹かれて行った。自分はずと松岡を訪ねて見ようと云う気になった。松岡は

自分と（恐らくは大抵な人と）違つて大風の吹く日が一番落着いて好いと称していた。だからその日などは殊に落着いているだろうと思つて、何度も帽子を飛ばせそうにしながら、やつと本郷五丁目の彼の下宿まで辿りつく、と、下宿のお婆さんが入口で、「松岡さんはまだ御休みになつていらつしやいますが」と、気の毒そうな顔をして云つた。「まだ寝ている？　恐ろしく寝坊だな」。「いえ、昨夜徹夜なすつて、ついさつまで起きていらしたんですかね、今し方寝るからつて、床へおはいりになつたんでございますよ」。「じゃまだ眼がさめているかも

知れない。兎に角ちよいと上って見ましよう。寝ていれ
ばすぐに下りて来ます」。自分は松岡のいる二階へ、足
音を偷みながら、そつと上った。上ってとつつきの襖を
あけると、二、三枚戸を立てた、うす暗い部屋のまん中
に、松岡の床がとつてあつた。枕元には怪しげな一閑張
の机があつて、その上には原稿用紙が乱雑に重なり合つ
ていた。と思うと机の下には、古新聞を敷いた上に、夥
しい南京豆の皮が、杉形すぎなりに高く盛り上つていた。自分は
すぐに松岡が書くと云っている、三幕物の戯曲の事を思
い出した。「やっているな」——ふだんならこう云って、

自分はその机の前へ坐りながら、出来ただけの原稿を読ませ、あいにく生憎その声に応ずべき松岡は、髭ののびた顔を括り枕の上ののせて、死んだように寝入っていた。勿論自分は折角徹夜の疲を癒している彼を、起そうなどと云う考えはなかった。しかし又この儘帰つてしまうのも、何となく残り惜しかった。そこで自分は彼の枕元に坐りながら、机の上の原稿を、暫くあつちこつち読んで見た。その間も風はこの二階を揺ぶってしつきりなく通りすぎた。が、松岡は依然として、静な寢息ばかり洩していた。自分はやがて、こうしていても仕方

がないと思つたから、物足りない腰をやつと上げて、静に枕元を離れようとした。その時ふと松岡の顔を見ると、彼は眠りながら睫毛の間へ、涙を一ぱいためていた。いや、そう云えば頬の上にも、涙の流れた痕が残っていた。自分はこの思いもよらない松岡の顔に気がつくと、さっきの「やっているな」と云う元気の好い心もちは、一時にどこかへ消えてしまった。そうしてその代りに、自分も夜通し苦しんで、原稿でもせつせと書いたような、やり切れない心細さが、にわか俄に胸へこみ上げて来た。「莫迦な奴だな。寝ながら泣く程苦しい仕事なんぞをするな

よ。体でも毀したら、どうするんだ」。——自分はその心細さの中で、こう松岡を叱りたかった。が、叱りたいその裏では、やっぱり「よくそれ程苦しんだな」と、内証で褒めてやりたかった。そう思ったら、自分まで、何時の間にか涙ぐんでいた。

それから又足音を偷んで、梯子段を下りて来ると、下宿の御婆さんが心配そうに、「御休みなすっていらっしやいますか」と尋いた。自分は「よく寝ています」とぶつきらぼうな返事をして、泣顔を見られるのが嫌だったから、匆々^{そつそつ}凧の往来へ出た。往来は相不変、砂煙が空へ

舞い上っていた。そうしてその空で、凄じく何か唸るものがあった。気になったから上を見ると、唯、小さな太陽が、白く天心に動いていた。自分はアスファルトの往来に立った儘、どっちへ行こうかなと考えた。

——大正七年十二月——

(削除分)

二

その頃自分は日本間の二階に、安物の西洋机や椅子を並べて、そこを書齋に定めている。本は一時大分売り払ったから、書棚にはどれも大抵穴のあいた所が出来ていた。その書棚のない壁には、西洋の画の複製が、額にな

って何枚もぶら下っていた。尤もこれはメデイチの複製が関の山で、碌なものは一つもなかった。額と云えばもう一つ、隅によせた机の前の壁には、写楽の幸四郎の複製の顔があった。当時の自分は如何に西洋人が褒め立てた所で、浮世絵が日本美術の精髓だろうなどとは、どうしても考えられなかった。大部分の浮世絵は、唯、版画としての色の面白さが自分に訴うだけだった。画家で云うと世界的な北斎が、自分は先大嫌まずいだった。彼はマンネリズムの大家であると共に、鼻持ちのならない俗趣味の大家だとしか思われなかった（何時かチオオデ・ムウ

アが、一枚の北斎を救う為なら、世界中の日本人を麿殺みなごろしにしても好いと書いたのを読んで、自分は半可の癖に生意気を云うなと憤慨した覚えがある。広重も人の騒ぐ程、難有い風景画家だとは思わなかった。歌麿は流石に立派な芸術家には違いなかったが、あの蘭灯の油のぬくみのような、纏綿たる情緒の世界は、余りに自分と縁が遠すぎた。清長は——下面倒だから省略するが、その中で自分がほんとうの意味で美しいと思ったのは、東洲斎写楽の絵と鈴木春信の絵とだけだった。そこでもう一度、机の前の壁にかけてある写楽の複製へ立ち戻るが、自分は

その額の下で、毎晩本を読んだり、小説を書いたりした。時々洒落れて、側机そばづくえや机の上へ、草花の鉢を置いた事があったが、無精な自分は水をやる事を忘れて、大抵は情なく枯らしてしまった。

この書齋の中が、混沌たる和漢洋の寄せ物であるが如く、その頃の（或は今でも）自分の頭の中には、やはり和漢洋の思想や感情が、出たらめ一ぱいつまっていた。だから読む本もそれだけ又、恐る可く雑駁を極めていた。のみならずその和漢洋が、それぞれの範囲内でも、やはり雑駁を極めていた。尤も洋と云っても語学は、独ドイツ乙語

も仏蘭西語フランスもものにならなかつたから、比較的ものにならなさの甚しくない英語で、一番余計本を読んだ（語学と云えば思い出すのは、当時成瀬と二人で伊太利語イタリアを習った事である。これは習う学生が我々二人の外にいなかったもので、途中で辟易し出したにも関らず、先生に対する義理から已むを得ず一年教わってしまった。おかげで「一、二、三、四」と云う勘定位なら、今でも出来る）。読んだ本の中で、義理にも自分が感服しずにいられなかつたのは、何よりも先ストリントベルグだった。その頃はまだシェリングの訳本が沢山あつたから、手あたり次第読んで見たが、自

分は彼を見ると、まるで近代精神のプリズムを見るような心もちがした。彼の作品には人間のあらゆる心理が、あらゆる微妙な色調の変化を含んだ七色に分解されていた。いや、「インフェルノ」や「レゲンデン」になると、怪しげな紫外光線さえ歴々としてそこに捕えられていた。「令嬢ジュリア」、「グスタフス・アドルフス」、「白鳥姫」、「ダマスクヘ」——こう並べて見ただけでも、これが皆同一人の手になったとは思われない程、極端に懸け離れたものばかりである。何かの中でドオデエは、小説を一つ書こうと思っても、パリの町には至る所に、

バルザックの影がさしていると嘆じていたが、ストリントベルグを知らない彼は、まだしも幸福な人間だった。

「マイステル・オラーフ」が現れて以来、我々は世界の至る所に、ストリントベルグの影がさすのを見た。しかもそれは独り人間の上ばかりじゃない。彼は獣も書いた。鳥も書いた。魚も書いた。昆虫も書いた。更に一步を進めては、日の光を吸っている草花や風に吹かれている樹木も書いた。実際彼は当時の自分にとって、丁度魂のあるノアの箱船が蜃気楼よりも大仕掛に空を塞いで漂っているような感があった。そうしてこう云う以上に彼の作

品を喋々するのは、僭越のような気が今でもする。又また喋々した所で、到底あの素ばらしい箱船が、髣髴出来るものじゃない。出来たと思つたら、それは僅に船腹の板をとめている釘の一本位なものだろう（序ついでに云うが、ストリントベルグの「青い本」の中に、彼は内村鑑三氏の「余は如何にして基督教徒たりしか」を読んだと云う事が書いてある。はつきりは覚えていないが、そこには何でもあの楽天的な日本人でさえ、神を求めるとにはこれ程苦しんでいるかとか何とか註がついてた。尤も彼に比べれば、楽天的なのは独り日本人に限った事じゃない）。じゃ嫌いな方は誰かというと、

モオパスサンが大嫌いだった。自分は仏蘭西語でも稽古する目的の外は、彼を読んでよかつたと思つた事は一度もない。彼は実に悪魔の如く巧妙な贖金使だった。だから用心しながらも、何度となく自分は贖金をつかませられた。そうしてその贖金には、どれを見ても同じような *NIEN* と云う字が押しあつた。強いて褒めればその巧妙さを褒めるのだが、遺憾ながら自分はまだ、す掘摸りに懐のものをはきぬかれて、あの手際は大したものだと敬服する程寛大にはなり切る事が出来ない。好悪から云つてこの二人の中間にいる作家のものも、ちよいちよい靦い

て見た事があるが、やはり面倒だからあとは省略する事にする。

それからこの自分の頭の象徴のような書齋で、当時書いた小説は、「羅生門」と「鼻」との二つだった。自分は半年ばかり前から悪くこだわった恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかった。そこでとりあえず先、今昔物語から材料を取って、この二つの短篇を書いた。書いたと云っても発表したのは「羅生門」だけで、「鼻」の方はまだ途中で止ったきり、暫

くは片がつかかなかつた。その発表した「羅生門」も、当時帝国文学の編輯者だった青木健作氏の好意で、やつと活字になる事が出来たが、六号批評にさえ上らなかつた。のみならず久米も松岡も成瀬も口を揃えて悪く云つた。

それから自分の高等学校以来の友だちの中には、一体自分が小説を書くのが不了見なのだから、匆々やめるが好いと意見の手紙をよこした男さえいた。自分が *Cacoethes Scribendi* と云う碌でもない拉甸語ラテンを覚えたのは、その男の手紙を読ませられたおかげである（彼はその下へ括弧をして、「書きたがる病」と註を入れていた）が、

自分は小説を書くのは書く事に意味を認めているのだから、出来不出来にまで心を煩わす必要がないと云う便利な論理を楯にして、自分で自分の弁護をした。勿論それでも心細い事は、依然として心細かった。事によると自分は、やはりその「書きたがる病」にとりつかれているだけで、中学の英語の教師にでもなる方が適材じゃないかと云う気もする事があつた。そこへ幸「新思潮」再興の相談が持ち上つたものだから、多少勇氣を得て「鼻」を書き出した。それが抄^{はかど}取らずにいる事は前にも云つたが、一週間ばかり捏ね返した揚句、やっと曲りなりにも

結末がついたのは、成瀬と二人で久米の所へ行つた、その日の晩の事である。自分は書いてしまふと、丁度鼻の先の置時計の針が、一時を指しているのを見た。書斎の中には、凋しぼんだ菊の匂がかすかにしている。前の壁には写楽の幸四郎が、人を莫迦にしたように脂やに下さがっている。机の上には書き損じた原稿用紙が、羅紗の色も見えない位ちらかっていた。自分はひどい気疲れと一しよに、何とも云えないはかない心もちがした。愉快なる可き小説が、一向愉快とも何とも思われなかつた。そうしたらどこか遠くの方で夜啼鶏の声が二、三度した。

六

「君の方の大学も退屈だろうが、こっちだって格別面白い事はない。英文科じゃ、松浦さんの講義が評判が好いようだ。斎藤さんの講義も聞いたが、これもロオレンス先生よりは面白いと思う。ロオレンスと云う人は個人的には好い御爺さんらしいが、講義だけは実際支離滅裂だね。そうそう、ロオレンス先生と云えば、この間僕が図書館の入口で遇ったら、僕をつかまえて、何だか訳のわ

からない事を十分ばかりしやべり続けた。英語が判然しないばかりでなく、一向要領を得ないから、唯、顔ばかり眺めていると、向うでも妙だと思つたと見えて *Are you Mr. —?* 何とかと云つた。そこで断々乎としてノオと云つたら、損をしたような顔をして、匆々元来た方へ歸つちまつた。して見ると、僕はそれまでそのミスタア・何とかと間違えられていたんだらう。これが今日までの所、僕とロオレンス先生との間に起つた一番親密な十分間だつた。

「西洋人には君も知っている通りまだ外に、スイフト先

生と云う人がいる。何でも松岡はこの間この先生に、英語で話を一つしろと命令されたら、「昔々或所に犬が三匹居りました。所がその犬が一匹どこかへ行ってしまった。すると暫くして又一匹どこかへ行ってしまった。そうしたら三匹目の犬も、やがて見えなくなりました。しまいました。先生、この三匹の犬がどこへ行ってしまったか御存知ですか」と云ったそうだ。勿論先生には、そんな事のわかる訳がないから、知らないと返事をした。すると松岡は「私も知りません」って、それっきりで御しまいにしちまったって云うんだがね。いくらスイフト

先生だって、（この先生自身も、この間久米に詩を読ませて、声だけ好いと褒めた事がある）こんな悪辣な学生にかかっちゃ、手がつけられないのに違いない。僕はこの話を松岡自身から聞いて、大おおに先生の方に同情した。

「それからこの間は、上田敏さんの講義の模様を知らせてくれて、大に面白かった。あの人位影響する所が広くって、あの人位何にもしていない人はない。考えると少し気の毒な気がする。その上この間上田さんの「独語と対話」を読んで見て、すべてが甚はなはだ陳腐なので驚いた。昔から上田さんと新しいと云う事とは、始終僕の頭の中

で一つになっただけ余計驚いた。が、考えて見ると、その新しいと云う事はインフオメエションの上の新しさで、思想そのものの新しさじゃなかったんだ。だからそう云う新しさに冷淡になった我々が、上田さんの書いたものを陳腐だと感じるのは、勿論不思議でも何でもないんだ。それでも「上田さんも古くなったかな」と思ったら、実際妙に寂しかった、上田さんは結局、いろんな著物をシツクリつける名人だったんだらう。が、我々の問題はもう著物やその著方を通り越して、下にある肉体に及んでるんだから仕方がない。

「この頃久米と僕とが、夏目さんの所へ行くのは、久米から聞いているだろう。始め行った時は、僕はすっかり固くなってしまった。今でもまだ全くその精神硬化症から自由になっちやいない。それも唯の気づまりとは違うんだ。さっき著物の例を出したから、その例をもう一度使うと、つまり向うの肉体があんまりよすぎるので、丁度体格検査の時に僕の如く痩せた人間が、始終感ず可く余儀なくされるような圧迫を受けるんだね。現に僕は二、三度行って、何だか夏目さんにヒプノタイズされそうな、——たとえばだ、僕が小説を発表した場合に、もし夏目

さんが悪いと云ったら、それがどんな傑作でも悪いと自分でも信じそうな、物騒な気がし出したから、この二、三週間は行くのを見合せている。人格的なマグネティズムとでも云うかな。兎に角そう云う危険性のあるものが、あの人の体からは何時でも放射しているんだ。だから夏目さんなんぞに接近するのは、一概に好いとばかりは云えないと思う。我々は大人と行かなくつても、まあいろんな点で全然小供じゃなくなっているから好いが、さもなかつたら、のつけにもうあの影響の捕虜になって、自分自身の仕事にとりかかるだけの精神的自由を失ってし

まうだろう。兎に角東京へ来たなら、君も一度は会って見給え。あの人に会う為なら、実際それだけにわざわざ京都から出て来ても好い位だ。――」

自分は当時菊池へ宛てて、こんな手紙を書いた事があった。

日本文学電子図書館

「芥川龍之介随筆集」

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

2014年3月14日 第1刷発行



日本文学電子図書館